

介護職員の実習生に対する意識の構造 —アンケート調査の自由記述分析をもとに—

Structure of the Consciousness for Trainee Carers —Based on an Analysis of a Free-description Questionnaire Survey—

(2019年3月29日受理)

名 定 慎 也

Shinya Nasada

Key words : 介護福祉士, 実習指導, コミュニケーション, スーパービジョン, テキストマイニング

本研究では、介護福祉士養成カリキュラムの介護福祉実習における、介護職員の実習生に対する意識の構造について調査した。調査は平成30年度実施の実習指導者講習会に参加した、介護に携わる職員から収集した自由記述アンケートの回答内容をKH Coderを用いたテキストマイニング分析し、介護職員の実習生に対する意識の構造を明らかにした。実習指導で困っていることは、「実習指導の方法」「実習指導者の思い（受入れ態勢での葛藤など）」「学生の行動」「現場と学校のギャップ」「学生との意思疎通」の5つが挙げられた。そして、介護職員が求める学生像には、「社会性」「実習意志」「実習態度」「人間性」の4つが挙げられた。総体的に「社会性を備え、実習意志が明確で、高齢者に寄り添える人間性を持ち、真剣に真面目な態度で実習に取り組める」者であることが見えてきた。したがって、現状の困っていることを解消することで、介護職員が求める実習生を育成することができると考えられた。分析で明らかにした、介護職員が求める学生像は、厚生労働省が定めた介護福祉士養成カリキュラム「資格取得時の到達目標」に照らし合わせると介護福祉士のベースとなるものと相対していることも示唆された。

はじめに

介護福祉実習において、実習指導者から「あいさつや一般常識などの礼儀やマナーが身につく、他者とコミュニケーションが図れる学生に実習に来てもらいたい」と聞くことがある。そのような基本的なことを学校で学び理解したうえで実習に臨んでほしいという期待が伺える。福井県社会福祉協議会がおこなった「平成29年度介護実習における実習指導者の指導の実態調査」において、介護実習に際し学生で困ったこととして、「利用者とのコミュニケーションが少ない」、「質問がなく、やる気を感じない」、「一般常識に欠ける（挨拶、年上に対しての言葉遣い、雑巾の絞り方、お茶の作り方、服のたたみ方等）」、「ルールを守る事の認識が薄い」「記録が書けない」¹⁾などが挙げられている。また、山下らは学生の目的意識のなさや実習施設側の実習指導体制の未熟さを指

摘し、指導者からみた実習生に対する印象として、「質問が少ない、意思表示ができない」、困っていることとして、「挨拶や言葉遣い、声掛けができない」²⁾などを挙げ、専門的知識や技術より、コミュニケーションや一般常識を含めた実習姿勢を問題視している。厚生労働省が定めた介護福祉士養成カリキュラム「資格取得時の到達目標」には「円滑なコミュニケーションのとり方の基本を身につける」³⁾とあり、養成校卒業時にコミュニケーションの基本を身につけておくことが求められている。また、「求められる介護福祉士像」には、「利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力」³⁾とあり、介護福祉士として概ね5年程度で的確なコミュニケーションが図れるようになっておくことが求められている。このことから、コミュニケーションの図り方や、常識・マナーなどは、実習に行くまでに習得してしまうものではなく、学校で基本的知識技術を

学び、実習という実践の場で経験を通し統合し学びながら、身につけていくものだといえる。

本研究では、介護現場の職員が実習生に対しどのような期待を持っているのか、実習指導においてどのようなことに困っているのか等を、実習指導者講習会に参加した介護に携わる職員から集めた自由記述を分析し、介護職員の実習生に対する意識の構造を把握する。また、その結果より、実習指導方法と実習指導者の育成方法について検討することを目的とする。

1. 研究の背景

1-1 介護福祉実習

介護福祉士養成課程のカリキュラムは、2009（平成21）年に大きく改変され、授業内容が「人間と社会」「介護」「こころとからだのしくみ」の三つの領域からとなった。2年課程では医療的ケアを含み1850時間の学習が必要である。教科目は、講義、演習、実習に分かれ、介護福祉実習はこれからの介護を支える人材を養成する介護福祉士教育の体系的な位置づけのもとで行なわれ、「三領域の学習内容を統合させて、介護とは何かを理解・再確認し、それを実践する基礎的能力を修得する学びの場である⁵⁾」となっている。

介護福祉実習全体（450時間）は、実習Ⅰと実習Ⅱに分けられ、各校によって実習時期、実習場所は異なるが、達成課題（到達目標）は以下のように指定されている⁶⁾。

① 実習Ⅰ（300時間以上）

利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者理解を中心とし、これに併せて利用者・家族とのかわりを通じたコミュニケーションの実践、多職種協働の実践、生活支援技術の確認などを行うことに重点を置く。

② 実習Ⅱ（150時間以上）

一つの施設・事業などで一定時間以上、継続して実習を行い、利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価や、これを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程の実践に重点を置く。

1-2 介護実習指導者

介護福祉士養成カリキュラムの改正により、介護実習

指導者にも資格要件が求められるようになった。実習Ⅰは「介護福祉士の資格を有する者又は3年以上介護業務に従事した経験のある者」、実習Ⅱは「介護福祉士として3年以上実務に従事した経験があり、かつ、実習指導者を養成する講習会として厚生労働大臣に届けられた実習指導講習会を修了した者。その他そのものに準ずる者として厚生労働大臣が別に定める者」⁷⁾となった。また、実習指導者一人につき五人まで受け入れ可能となっている。

介護実習指導者講習では、①介護の基本、②実習指導の理論と実際、③介護過程の理論と指導方法、④スーパービジョンの意義と活用及び学生理解、⑤実習指導の方法と展開、⑥実習指導における課題への対応、⑦実習指導者に対する期待など合計25時間の講習を修了する必要がある。

このように介護福祉実習は、介護福祉士を目指す学生が、専門性を備えた適切な介護の実践力を身につけるために重要な役割を持ち、現場でその指導にあたる指導者は、介護福祉士としての実務経験及び実習指導者講習修了した者であって、養成校教員と連携をとり、質の高い介護福祉士の育成を図る重要な役割を担っている。

2. 研究方法

2-1 調査方法

介護実習指導者講習会に参加した33名にアンケート調査を行なった。実施場所及び時期は平成30年6月に広島県で17名、平成30年10月に兵庫県で16名、合計33名に実施した。

アンケートの項目は、基本属性（性別、年齢、福祉・介護職経験年数、所属）と、質問内容「①実習にはこんな学生に来てほしい、②実習生で苦勞すること、③実習指導で悩むこと、④実習生をどのように育てたいか、⑤実習生から学ぶこと、⑥スーパービジョンの講習を受けて気づいたこと」について収集した。

調査にあたっては、倫理的配慮として、研修や研究目的以外では使用しないこと、個人情報保護に努めることを説明し、同意を得た上で実施した。

2-2 分析方法

収集した基本属性については集計を行なった。

アンケートの自由記述は、質・量の両要素を取り入れ、より客観性をもたせるために、記載内容を意味のある構成単位に分割して類似性のあるものを集約していくテキストマイニングとしてKH Coderを用いた。自由記述の頻出用語の回数や、その繋がりなどを整理し、類似性のあるものをコーディング（カテゴリー分け）し、介護職員の実習生に対する意識の構造を分析した。

※アンケート項目の質問内容④⑤⑥については、テキストマイニングは実施していない。

3. 研究結果

3-1 調査対象者の属性

本研究におけるアンケート対象者の属性は、表1に示した。

性別は女性が86%を占め、年齢は、40歳代が最も多い(42%)。経験年数は10年以上の経験者が多い(85%)。所属に関しては、訪問介護事業所が8名(24%)と最も多く、デイサービスや、小規模多機能型居宅介護、居宅介護支援事業所など居宅に関する事業に所属する者が半数(58%)を占めた。介護福祉実習指導者講習が始まった当初は主な実習先の施設である、特別養護老人ホームや老人保健施設の職員が実習受け入れの継続のため、受講することが多かったが、今実習指導者講習では、「介護福祉実習指導者講習を受けた理由」(口頭質問)につ

表1 アンケート対象者の基本属性

		全体(N=33)	
		N	%
性別	男	7	23.3
	女	26	86.7
年齢	30代	4	12.1
	40代	14	42.4
	50代	8	24.2
	60代以上	5	15.2
	不明	2	6.1
経験年数 (福祉・介護職)	3~5年	1	3.0
	6~10年	4	12.1
	11~15年	12	36.4
	16~20年	12	36.4
	21年以上	4	12.1
所属	特別養護老人ホーム	6	18.2
	老人保健施設	3	9.1
	有料老人ホーム	4	12.1
	デイサービス	5	15.2
	訪問介護事業所	8	24.2
	小規模多機能型居宅介護	3	9.1
	居宅介護支援事業所	3	9.1
	その他(講師)	1	3.0

※ 経験年数は、資格の有無に関らず福祉・介護職関係の勤務年数の合計とした

※ 所属は現在もしくは最終就職先とした

いて、「実習施設として、指導者がいないので必要であった」という者は3,4名で、残りの受講者は、「今後必要になるから」、「自分のスキルアップのため」と答えた。

3-2 アンケート調査の結果

3-2-1 実習にはこんな学生に来てほしい

1) アンケート自由記述は、以下の通りである。

(一部抜粋)

コミュニケーションが取れる人
 あいさつがきちんとできる人。ありがとうございますと言える人
 社会常識が通じる人(あいさつ、礼儀作法、マナーを身につけている人)
 日本語が理解でき、日本語で会話できる人
 高齢者に失礼なことを言わない人。友達のような会話をしない人
 ゆっくり聴取できる人。話がしっかり聞ける人
 介護に興味・関心のある人
 学ぼうとする姿勢のある人。向上心、向学心のある人
 意欲的、積極的な人。社会性のある人
 目標が明確でそれに向かい取り組める人
 実習に真剣に取り組める人。真面目に仕事に取り組む人
 前向きな人。熱意のある人
 高齢者の気持ちに寄り添える人
 笑顔の多い人。明るい人。心根の優しい人。素直な人
 高齢者や、周囲に思いやりの心を持つ人
 老人に敬意を持ってくれる人。誠実さ
 仕方なく資格を取るのではなく、高齢者が好きな人
 体調を整え実習に臨める人
 仕方なく資格を取るのではなく、高齢者が好きな人
 言われたことだけをやるのではなく、聞きながら実習に臨んでほしい
 先を考えられる予測できる人
 臨機応変に対応することができる人(しよとする姿勢がある人)
 学校との違いがある現場であっても、何事にも興味を持ち、素直に受け入れられる人

※内容が類似しているものなどは整理して表示している

自由記述では、「あいさつができる」、「尊敬の念を持つ」、「話がしっかり聴ける」など「コミュニケーションが図れる」こと。「積極性」や「向上心」を持つなど「実習意欲があること」、「介護に興味関心があること」などが示された。

2) 頻出150語

頻出150語は表2の通りである。

KH Coderの頻出150語でリストアップしたところ、115語抽出できた。抽出語のうち出現回数が多かった名詞は、「人、高齢者、あいさつ、興味、姿勢、積極的、実習、素直、介護、仕事、笑顔、前向き、目標、コミュニケーション、マナー、意欲的、会話」であった。

出現回数68回「人」が最も多く、次に8回「高齢者」が多い。続いて多かった抽出語の出現回数5回は、「あいさつ」、「興味」、「姿勢」、「積極的」、出現数4回の抽出語は「実習」、「素直」であった。KH Coderのマニュアル等々に示されるように、出現回数が少なくても重要なキーワードとなる用語がある。出現数1回の中には「社会常識」や「礼儀作法」、「熱意」、「誠実」など頻出用語に類似した用語もあり関連性を見る際にポイントとする場合

がある。

表2 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	68	テキパキ	1	就業	1
高齢者	8	ペース	1	終わる	1
あいさつ	5	ポジティブ	1	常に	1
興味	5	メンタル	1	心	1
姿勢	5	違い	1	心根	1
積極的	5	一人ひとり	1	身	1
実習	4	一生懸命	1	整える	1
素直	4	飲み込み	1	生きる	1
介護	3	何事	1	誠実	1
学ぶ	3	学校	1	積極性	1
気持ち	3	学生	1	接する	1
考える	3	感じる	1	先	1
仕事	3	基本	1	線引き	1
持つ	3	強い	1	早い	1
取り組む	3	業務	1	多い	1
笑顔	3	傾聴	1	多職種	1
前向き	3	敬意	1	体調	1
目標	3	賢い	1	対応	1
コミュニケーション	2	現場	1	挑戦	1
マナー	2	言える	1	通じる	1
意欲的	2	向かう	1	転職	1
会話	2	向学心	1	努力	1
関心	2	合わせる	1	入	1
寄り添える	2	仕方	1	熱意	1
言う	2	思いやり	1	聞く	1
向上心	2	資格	1	聞ける	1
好き	2	時間	1	本当に	1
持てる	2	自分本位	1	友達	1
取り組める	2	失敗	1	予測	1
真剣	2	失礼	1	様々	1
真面目	2	社会常識	1	臨む	1
日本語	2	社会人経験	1	臨める	1
明るい	2	社会性	1	臨機応変	1
明確	2	取る	1	礼儀作法	1
優しい	2	取れる	1	老人	1
理解	2	守れる	1	話す	1
ありがとう	1	受け入れる	1		
いろいろ	1	周り	1		
やる気	1	周囲	1		

※抽出語は115語

3) 共起ネットワーク

共起ネットワークは図1の通りである。頻出語から共起性を見ると、次の5つに分かれた。まずこの図では、「介護に興味関心がある」の категорияは他とのつながりは見えないが、介護に興味関心があるということは介護福祉士を目指す学生には前提条件と考えられる。そこから、高齢者が好きで、気持ちに寄り添えるやさしい人。マナーや日本語などコミュニケーション能力が身についた人。目標が明確で意欲的に取り組める人。明るく、真面目で、

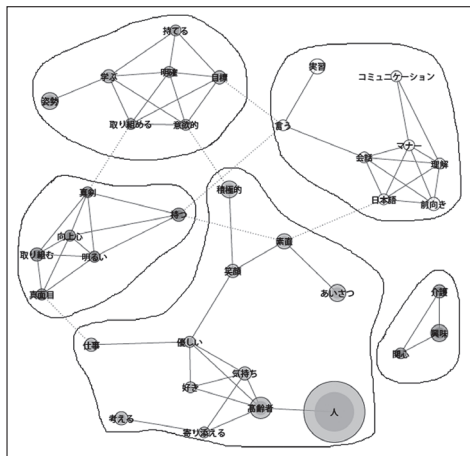


図1 共起ネットワーク

向上心を持った人が、実習生として求められることが見えた。

また、図2の共起ネットワークは、関連語として「人」を中心に共起された語を抽出したものである。(手順：関連語検索で「人」と直接入力し、フィルタ設定で表示する語を上位20に設定し共起ネットワークを作成)。人を中心に置くと、介護に興味関心があり、高齢者に寄り添い、積極的な姿勢で、会話(コミュニケーション)を図るなど、向上心を持って取り組む人(学生)が求められていることが視覚的にみることができる。

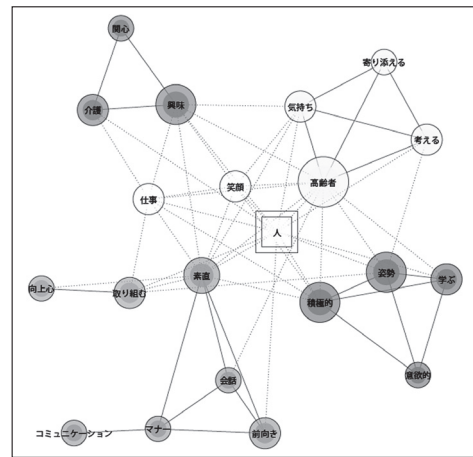


図2 人を中心に置いた共起ネットワーク

4) コーディングの作成

コーディングとは、抽出した複数の言葉を一つのテーマ(コード)として集約していくことである。コーディングをする意義は、「複数の言葉を一つのテーマとして集約することのメリットとして、頻度が高くなかった抽出語、あるいはそれを含む文書でも、分析の中に取り込めること。データ全体、回答者全員が語ろうとした内容を総括的に見渡す⁸⁾」ことができるからである。実際に抽出語を全体に並べて、共起ネットワーク図などを参考にしながら、テーマに集約していくと、表3のように、4つのテーマ①社会性、②実習意志、③実習態度、④人間性にコーディングができた。①「社会性」は、常識、マナー、コミュニケーションなど、社会人として必要な能力を集約した。②「実習意志」は、目的、積極的、意欲的など、実習に臨む心意気や姿勢を集約した。③「実習態度」は、真剣、真面目、体調(管理)、明るいなど、実習中の態度を集約した。④「人間性」は、素直、笑顔、

優しい、寄り添えるなどで、介護福祉士を目指す性質的要素を集約した。共起ネットワークで1つのカテゴリとして挙がった「介護、興味、関心」については、介護福祉士を目指す者としての土台とも考えられるので、「人間性」の中に集約した。

表3 コーディング

NO	テーマ	抽出後
1	社会性	コミュニケーション、マナー、会話、理解、前向き、日本語、実習、言う、社会常識、社会人経験、社会性、礼儀作法、学校、基本
2	実習意志	目標、明確、積極的、意欲的、取り組める、理解、学ぶ、姿勢、持てる、受け入れる、予測
3	実習態度	真剣、真面目、向上心、向学心、明るい、持つ、テキパキ、臨機応変、体調、ありがとう
4	人間性	素直、気持ち、笑顔、優しい、思いやり、寄り添える、考える、誠実、高齢者、介護、興味、関心、傾聴、敬意

5) コーディング結果の単純集計と階層クラスター

コーディング結果の単純集計は表4の通りである。有効回答件数は33件であった。どんな学生(実習生)が求められているかでは、「人間性」が一番高く、次いで「実習意志」となっているが、どのテーマも頻度が高く共起性が見えた。次に、コーディングの階層クラスターを図3に記した。4つのテーマ同士にも関連性が示された。中でも「実習意志」と「社会性」の共起性が高かった。

表4 コーディング結果の単純集計

	テーマ	頻度	割合
1	社会性	12	36.4%
2	実習意志	15	45.5%
3	実習態度	10	30.3%
4	人間性	17	51.5%
	コード無し	2	6.1%
	有効回答件数	33	

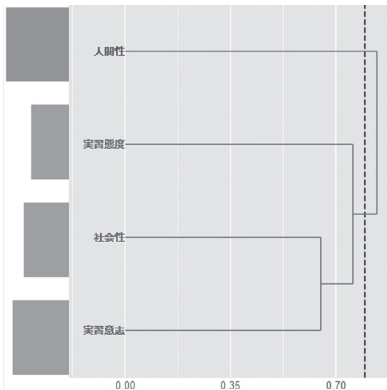


図3 コーディングの階層クラスター

3-2-2 実習生で苦勞すること

1) アンケート自由記述は、以下の通りである。

(一部抜粋)

あいさつができない、言葉遣い、反応や返事が無い、声が小さい など
 日本語が通じない
 職員とのコミュニケーションの図り方
 利用者とのコミュニケーションがなかなかとれない
 人の意見に傾聴できない
 日誌の内容が理解できない
 質問がない
 メモをとる子が少ない
 勝手に行動する。返事がなく行動する
 自分自身の考えが通用しないこと
 世代が違うためか、考え方が違うところ
 伝わっているのか解らない態度がある人に苦勞する
 相手が何を考えているかわからない
 自身の固定観念にとらわれ、意見や指導をなかなか聞き入れてくれない
 体調を崩してしまう。緊張がほぐれず、最終日までガチガチな状態
 介護職について基本を理解してもらえない
 バイトなどで寝不足で来る
 体調悪化や怪我をしても、単位取得のために無理をさせてしまう
 専門意識をしっかりと持てない(近所のお姉さんやお兄さんのような感じ)
 指導者が上手に相手に伝えることができない
 思うこと頭で考えることが実習生に伝えられない
 自分自身が養成校の出身ではないので、わからないことがある

※内容が類似しているものなどは整理して表示している

自由記述から、実習生に苦勞することは、「あいさつができない」、「声が小さい」、「記録が書けない」などコミュニケーションに関することや、「世代が違うため学生が考えていることがわからない」、「養成校卒業でないので指導内容等わかりにくい」など、指導方法に苦勞することは、「学生が勝手な行動をする」、「体調管理ができない」など学生の実習姿勢などが示された。

3-2-3 実習指導で悩むこと

1) アンケート自由記述は、以下の通りである。

(一部抜粋)

自分が何を教わりたいのかわからないため、指導内容で迷う
 返事、応答、反応がないので、わかっているかどうかかわからない
 実習生にわかる言葉で説明すること
 実習生に、どのように話をしたら伝わるのか悩む
 指導者の言い分が伝わっているのかよくわからない
 基本的なことを伝える必要があると思うので、そのあたりの伝え方が難しい
 実習生にどこまで伝えていいのかわからない。実習でどこまで指導するのか明確でない
 利用者のことをどこまで話していいのかわからない
 どこまで現場を見て、直接的な介助はどこまで経験させていいのかわからない
 実習生が何がわからないのかわからない、わからない
 実践と学校の学びのギャップ。実際、現場でのやり方の違いで迷わないか
 自分のやり方、学校で、習った通りにしようとして、利用者の生活や動きに合わせられないことが多い
 言われたことはできるが、考える力を発揮しない。考える能力が低下している
 通常業務を行いながらの指導になるので、終日指導できないことがある
 目標達成のサポート不足になることもある
 職員間で技術の統一ができていない、指導者ごとに同じケアでも方法が異なっている
 注意したり、叱ると前に進めなくなってしまう人が多いこと
 来客直前に相談や質問に来る(タイミングが悪い)
 実習で学ぶ姿勢が継続できるための方法
 文章が下手な実習生が多いので、国語の勉強が必要
 玄関に入り方から、指導が必要
 通常業務を行いながらの指導になるので、終日指導できないことがある
 目標達成のサポート不足になることもある
 介護の倫理観の伝え方
 この仕事に就く気がない人が実習をすることは、利用者に申し訳ない

※内容が類似しているものなどは整理して表示している

自由記述から、「学生が何を教わりたいのかわからない」、「返事がなくわかっているのかわからない」、逆に「指導者側がどう伝えたらいいのかわからない」など意思疎通(コミュニケーション)で悩む内容が多い。また「現場と学校のギャップ」や「どこまで技術を教え・情報を伝えるか

などの指導内容での悩みが示された。また、「職員側の指導方法の統一ができていないことや、十分に指導時間を確保できない」という悩みも見られた。

3-2-4 実習指導で困ること

上記の「実習生で苦勞すること」と「実習指導で悩むこと」は、類似した設問であるため、2つを合わせて、「実習指導で困ること」として分析する。

1) 頻出150語

頻出150語は表5の通りである。

出現回数が多い用語は、「指導」、「伝える」、「実習生」、「利用者」、「学校」「ギャップ」、「考える」、「コミュニケーション」であった。「指導(16回)」、「伝える(9回)」、「指導者(6回)」などは、「伝える」という意味合いのものが頻出している。「利用者(7回)」はケアの対象者であ

表5 頻出150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
指導	16	質問	2	一緒	1
実習生	11	実習内容	2	応答	1
伝える	9	勝手	2	下手	1
利用者	7	小さい	2	課題	1
学校	6	少ない	2	解る	1
指導者	6	上手い	2	怪我	1
人	6	場合	2	外国	1
多い	6	回る	2	学習	1
伝わる	6	生活	2	学生	1
ギャップ	5	声	2	楽しい	1
介護	5	声掛け	2	感じ	1
考える	5	前	2	環境	1
思う	5	前向き	2	気	1
コミュニケーション	4	相手	2	急	1
学ぶ	4	体調	2	教える	1
業務	4	知る	2	教わる	1
現場	4	注意	2	緊張	1
行う	4	統一	2	近所	1
自分	4	難しい	2	苦勞	1
必要	4	能力	2	傾聴	1
理解	4	反応	2	兄さん	1
メモ	4	勉強	2	経験	1
違う	3	明確	2	継続	1
学び	3	目	2	欠席	1
基本	3	目標	2	見える	1
見る	3	来る	2	見学	1
現実	3	話す	2	違う	1
言葉	3	ひとつ	1	玄關	1
行動	3	アドバイス	1	言い分	1
指導方法	3	カリキュラム	1	言い方	1
実習	3	ガチガチ	1	個性	1
職員	3	ケア	1	固定観念	1
態度	3	サポート	1	慌ただしい	1
内容	3	タイミング	1	考え	1
悩む	3	ニュアンス	1	行く	1
返事	3	バイト	1	合わせる	1
方法	3	フォローアップ	1	国語	1
迷う	3	ボキャブラリ	1	困る	1
あいさつ	2	レクレーション	1	最終	1
やり方	2	レベル	1	作成	1
意見	2	悪い	1	仕方	1
介助	2	悪化	1	姉さん	1
感じる	2	案	1	子	1
技術	2	意思	1	思い	1
言う	2	意思疎通	1	指導内容	1
言葉遣い	2	意識	1	指標	1
考え方	2	意欲	1	施設実習	1
仕事	2	異なる	1	資格	1
姿勢	2	違い	1	資料	1
自分自身	2	育つ	1	持つ	1

※抽出語は150語

る。「学校(6回)」は学生の学びの場で、連携が必要な場である。また、「ギャップ(5回)」「現場(4回)」と学校と現場の差を連想させる用語なども見られる。

2) 共起ネットワーク

共起ネットワークは図4の通りである。全体を見ると、「実習生」、「学校」、「利用者」のバブルが大きく、キーワードとなる。次に、抽出語からテーマを集約すると、5つのテーマ①実習指導の方法、②実習指導者の思い・実習指導の難しさ、③学生の行動と困ること、④現場と学校のギャップ、⑤学生との意思疎通にコーディングできた(表6)。しかし、抽出語に、「少ない、多い、難しい」などの形容詞や、「目、声」など名詞であっても用語としてそれだけでは意味が通じない言葉が多く、ポイントが見えにくい。

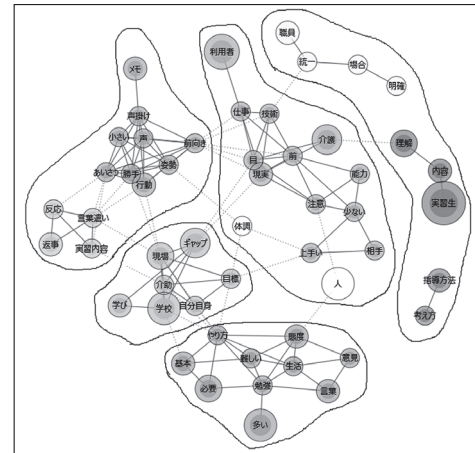


図4 共起ネットワーク

表6 コーディング

NO	テーマ	抽出後
1	実習指導の方法	職員、統一、場合、明確、理解、内容、実習生、指導方法、考え方、指導者、指導内容
2	実習指導者の思い・実習指導の難しさ	利用者、仕事、技術、目、現実、前、介護、能力、注意、少ない、相手、上手い、人、体調
3	学生の行動と困ること	やり方、基本、必要、勉強、難しい、生活、態度、言葉、意見、多い
4	現場と学校のギャップ	ギャップ、現場、介助、自分自身、目標、学校、学び、迷う
5	学生との意思疎通	メモ、声掛け、声、小さい、前向き、姿勢、勝手、行動、あいさつ、反応、実習内容、返事、反応、コミュニケーション、質問、意思疎通

5) コーディング結果の単純集計と階層クラスター

コーディング結果を単純集計したものが表7である。「実習で困ること」について、「実習指導の方法」、「実習指導者の思い・実習指導の難しさ」、「学生の行動」、「現場と学校のギャップ」、「学生との意思疎通」が、図5のように共起性が示された。「学生との意思疎通」と「実習指導者の思い・実習指導の難しさ」、「学生の行動」の

3つの共起性が高い。

実習生が何を学びたいのかわからないとか、実習生のコミュニケーション能力が低いこと等、指導者と実習生が上手く意思疎通が図れないことや、指導者が実習生にどこまで教えたらいのか、どう伝えたらよいのかなど実習指導の難しさを感じる。そして、上手く指導や意思疎通が図れないことによって、実習生が勝手に行動したり、自分のやり方、考え方を優先してしまったりするという、「学生の行動」につながっていることがわかる。

表7 コーディング結果の単純集計

	テーマ	頻度	割合
1	実習指導の方法	16	48.5%
2	実習指導者の思い、実習指導の難しさ	16	48.5%
3	学生の行動	10	30.3%
4	現場と学校のギャップ	11	33.3%
5	学生との意思疎通	16	48.5%
	コード無し	1	3.0%
	有効回答件数	33	

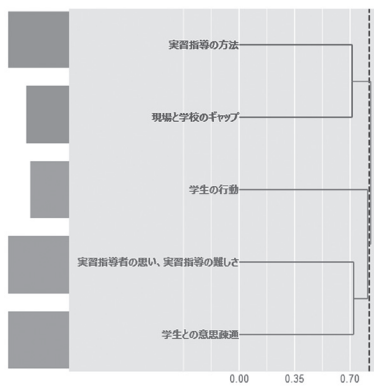


図5 コーディングの階層クラスター

3-2-7 その他のアンケート自由記述の結果

その他、アンケートで収集した、介護に携わる職員の思いや、意見を設問ごとに、一部抜粋して、参考に記載する。

1) 実習生をどのように育てたいと思うか (一部抜粋)

この仕事の厳しさ、面白さ、やりがいを少しでも理解できるように実習を経験することで、この仕事に興味を持ってもらえるようにする「介護の仕事は楽しい」と感じてもらえるように成功体験をさせたい職業に対して、目標や、やりがいを持って育みたい介護福祉士という仕事に誇りを持ってもらうように育てる現場でいろいろな経験をさせ、社会人としての人間関係やマナーを身につける利用者自身のことを理解したうえで、個々に合わせて接することのできる人利用者に対して「ありがとうございます」と言える人質が高いサービスができるように、人の気持ちに寄り添える人に育てたい介護と介助の違いを理解して、その人に応じた介護計画が立てられるように人を敬う気持ちがあるように
 介助ひとつにしても、実施することの根拠を理解できるように自分で考え行動できるようになる。基本のルールを覚えられるように自分のしていることをきちんと振り返れる
 コミュニケーションができるように
 生き活きと楽しく、積極性のある人材に育てたい
 何に対しても疑問を持ち、質問できる、自分の意見を言えるように育てたい
 高齢者と向き合える人
 対人援助の専門職だと思える指導
 正しいことを伝えていきたい、目標を持って取り組むことの大切さを伝えたい
 介護職として働くことに希望を持ってもらえるように
 先を考えられる。謙虚さがある。相手を尊重できる。価値観を押し付けられない
 多職種連携の重要性を理解してほしい

2) 実習生から学ぶこと (一部抜粋)

素直な意見にハツとさせられることがある
 最新の知識、技術を学んできているので、逆に教えられることがある。刺激になる
 純粋な気持ち、客観的な視点。丁寧さ
 初心を忘れないということ。自分も勉強しないといけないという思い
 素直なところ。笑顔の良いところ。若さ。元気
 「教える」ということは「学び続けなければならない」ということ
 職員への指摘で、介護内容等を見直すべききっかけになる
 指導内容の統一の大切さ。新たな視点での気づき
 介護職を誇りに思えるようになる
 仕事に対する今の子の考え方。若者の雰囲気や考え方を知ることができる
 慣れてないからこそ感じ取れること
 自分の普段の仕事、態度等を振り返らせてくれる
 介護職が日々当然のように行っていることが、利用者主体ではなく、効率を優先させてしまっているところなどに気づく

3) スーパービジョンの講習を受けて気づいたこと

(一部抜粋)

最終的にコミュニケーションが大事。職員間の事前情報共有、意識統一が必要で日々のコミュニケーションが必要だと思った
 実習生の気持ちになって考え、指導に当たることがあれば、話に耳を傾けて、一緒に問題に取り組みたいと思う
 学生の指導にあたることで、指導者も成長する
 グループワークをする中でも、やはりつい自分の価値観で判断し「どっちが正しいか」という見方になってしまいがちになった。スーパービジョンの研修を行うことで、そういう判断は危険だと改めて感じた。それぞれの視点を理解しつつ、問題の原因はどこにあったのかを、本人たちに気づかせることが大切だと考えさせられた
 最初は指導する立場のみ考えていました。しかし、相手の立場に立つことの重要性を再認識しました
 実習生の思いや担当職員の思い、相手の思いをしっかりと受け止め指導していきることの大切さを感じた。また、注意など行ったら精神面が落ちてしまうことが気になっていたが、伝える言葉を選ぶことの大切さも感じた
 ※内容が類似しているものなどは整理して表示している

4. 考 察

4-1 介護職員に求められる実習生像

介護職員への自由記述アンケート「実習にはこんな学生に来てほしい」についてKH Coderを用いテキストマイニングを行った。自由記述回答中に頻出する用語の検索、共起ネットワーク描画等から、複数の言葉を一つのテーマとして集約(コーディング)し、介護職員が実習生に求める姿の傾向を探った結果、①社会性:常識、マナー、コミュニケーションなど、社会人として必要な能力。②実習意志:目的、積極的、意欲的など、実習に臨む前向きな姿勢。③実習態度:真剣、真面目、体調(管理)、明るいなど、実習中の態度。④人間性:素直、笑顔、優しい、寄り添えるなど、介護福祉士を目指す学生の姿と、4つのカテゴリーに収束することができた。また、図2の人を中心に置いた共起ネットワークからも、介護に興味関心があり、高齢者の気持ちに寄り添え、常識的なコミュニケーションが図れ、意欲的・積極的に学ぶ姿勢がある学生(実習生)を求めていることが読み取れた。この2つをまとめてみると、介護職員が理想とする実習生は、「社会性を備え、実習意志が明確で、高齢者に寄り添える人間性を持ち、真剣に真面目な態度で実習に取り

組める」ことのできる実習生が来てくれることを期待していると考えることができる。

4-2 介護職員が実習指導で困っていること

介護職員への自由記述アンケート「実習生で苦労すること」、「実習指導で悩むこと」の2つの設問を統合し、KH Coderを用いテキストマイニングを行った。自由記述回答中に頻出する用語の検索、共起ネットワーク描画等から、複数の言葉を一つのテーマとして集約（コーディング）し、介護職員が実習生で困ることの傾向を探った結果、①実習指導の方法、②実習指導者の思い・実習指導の難しさ、③学生の行動、④現場と学校のギャップ、⑤学生との意思疎通の5つのカテゴリーに収束することができた。しかし、実習指導で困ることは、大きく分けると、実習生側の問題と実習指導者側の問題、学校との連携に関する問題の3つがあるため、テキストマイニングの分析で、用語をもとに探っていくと、それぞれの困りごとが混在してしまい「実習指導で困ること」の構造が見えにくいものとなった。

自由記述の内容とテキストマイニングで集約した5つの分類等を並べて考察すると、実習指導者側で困っていることは、実習指導者自身が養成校を卒業して介護福祉士の資格取得をしていないので、実習の指導方法がわからなかったり、そのように介護を学んできた背景の違う職員が多くいる介護現場であったりするため、実習指導の統一ができていないことや、実習生に対して、共通認識ができていないことで実習指導に困っていることがわかった。実習生側の問題として困っていることは、「あいさつができない、メモを取らない、何がしたいかわからない、指導しても伝わっているのかわからない、自分の思いで勝手に行動してしまう」などがあり、その中でもコミュニケーションの問題が目立っている。5つの分類でも、指導者と実習生の意思疎通がうまく図れないことが困っていることとして集約できており、指導者と実習生の意思疎通を円滑にしていかなければならないことがわかる。学校側の問題としては、5つの分類の中にも挙げた、「現場と学校のギャップ」を指摘できる。学生は学校で学んだことが正しいと、現場でのケアを受け入れられなかったり、実際のケア現場を見て、学校で学んだこととのギャップに悩んだりしており、指導者も学

校でどのような学習をしているのか、すべての職員が把握できていないため指導に困っていることがわかった。

その他、図3のコーディングの階層クラスターで、「学生との意思疎通」と「実習指導者の思い・実習指導の難しさ」、「学生の行動」の3つ関係性が読み取れた。解釈すると、指導者と実習生が上手く意思疎通が図れないことや、指導者が実習生にどこまで教えたらいのか、どう伝えたらよいかなど、実習指導の難しさを抱えている。そのように、上手く指導や意思疎通が図れないことによって、実習生が勝手に行動したり、自分のやり方、考え方を優先してしまったりし、「学生の行動で困る」ことが発生するという構造がわかった。

5. 結 論

本研究では、介護職員の実習生に対する意識の構造について、自由記述のアンケートの回答内容を分析することにより明らかにすることを目的とした。介護実習に関する先行研究は多く、福田らによる「介護実習指導者の「自信のなさ」に関する要因と改善に向けた課題の研究」⁹⁾や高木による「介護職員が実習指導で困惑した実習生の姿勢・能力」¹⁰⁾、橋本による「介護実習指導者講習会の課題」¹¹⁾、福井県社会福祉協議会がおこなった「平成29年度介護実習における実習指導者の指導の実態調査」などがあり、実習施設、実習指導者、実習生、学校などの問題点や課題が検討されている。

先行研究の中で、介護福祉実習において、実習生で困ったことなどは、どの研究も似た結果が示されている。例えば、前記したように、「利用者とのコミュニケーションが少ない」、「質問がなく、やる気を感じない」、「一般常識に欠ける（挨拶、年上に対しての言葉遣い、雑巾の絞り方、お茶の作り方、服のたたみ方等）」、「ルールを守る事の認識が薄い」「記録が書けない」、「指示に従ってくれず自分で行動してしまう」などが挙げられている。また、実習の受入体制で困ったことは、「指導職員のローテーション。実習の目的にそった指導」、「勤務体制によって学生となかなか関われない」、「職員不足で十分に指導できない」¹²⁾など、受入れ体制の未整備による実習指導者の葛藤が挙げられている。指導方法では、「学生に対して指導にバラツキがある」、「職員によって学生への対

応に差が出てしまう」、「昔のやり方を教えてしまう人がいる」¹³⁾ など統一した指導ができていないことや、学校での学びと現場の差などが挙げられている。

本研究においてもアンケートの自由記述では、同様の結果が示された。その内容を、KH Coderを用いテキストマイニングを行い分析した結果、介護職員の実習生に対する意識の構造を図6に記すことができた。実習指導で困っていることは、実習指導の方法、実習指導者の思い・実習指導の難しさ（受入れ態勢での葛藤など）、学生の行動、現場と学校のギャップ、学生との意思疎通の5つある。そして、介護職員が求める学生像は、「社会性を備え、実習意志が明確で、高齢者に寄り添える人間性を持ち、真剣に真面目な態度で実習に取り組める」人である。したがって、現状の困っていることを解消していくことで、介護職員が求める実習生を育成することができる。分析で明らかにした、介護職員が求める学生像は、厚生労働省が定めた介護福祉士養成カリキュラム「資格取得時の到達目標」に照らし合わせると「相手の立場に立って考える姿勢」、「円滑なコミュニケーション」、「的確な記録・記述」、「人権擁護の視点職業倫理」など、介護福祉士のベースとなるものと相対していることもわかった。

困っていることを解消する方法の一つとして、介護職員の学生に対する意識を変えることが必要であると考えられる。実習指導者講習会を実施している際、最近の介護福祉士を目指す学生のイメージを口頭で聴くと、マイナスイメージの中に「コミュニケーションがうまく図れない」、「記録が書けない」、「一般常識、礼儀、マナーが欠けている」など社会性の低さを指摘されることが多い。そういったマイナスの先入観は実習生の「できないこと」を強調させてしまう恐れがある。実習生はまだ社会経験が少なく、いくら対人援助の専門職を目指す者であっても、十分にコミュニケーションや、人との関係作り、礼儀やマナーなど身につけていないのは当然ではないだろうか、はじめに述べたように学校で基本的知識技術を学び、実習という実践の場で経験を通し統合し学びながら、社会性を身につけさせていくという意識を持つことが、実習指導者や介護職員にも求められるのではないだろうか。「学生」とひとくくりではなく、「できることを伸ばす」、「個性を理解し個別に対応する」という福祉の

理念を学生指導にも活かす必要がある。そのためには、蒲生らが「実習先と共に構築するスーパービジョンと実習マネジメントに関する研究」¹⁴⁾の中で述べているように、学校・養成校教員と、施設・実習指導者が連携を強化すること、また、スーパービジョンをしっかりと学び、実践し、指導者・教員、学生の双方が相乗的に成長していくことが重要である。

本研究のアンケート調査を実施した際、実習指導者講習会のスーパービジョンを学ぶことで、実習生の育成指導において意識の変化がみられた。例えば、「グループワークをする中でも、やはりついつい自分の価値観で判断し、どっちが正しいか、という見方になってしまいそうになった。スーパービジョンの研修を行うことで、そういう判断は危険だなと改めて感じた。」、「最初は指導する立場のみ考えていました。しかし、相手の立場に立つことの重要性を再認識した。」、「実習生の思いや担当職員の思い、相手の思いをしっかりと受け止め指導していくことの大切さを感じた。また、注意など行ったら精神面が落ちてしまうことが気になっていたが、伝える言葉を選ぶことの大切さも感じた。」などが前記したアンケート結果に示されている。こういった意見を鑑みても実習指導者がスーパービジョンを学ぶ意義は高く、実習に関わる職員へ浸透していくことが求められる。

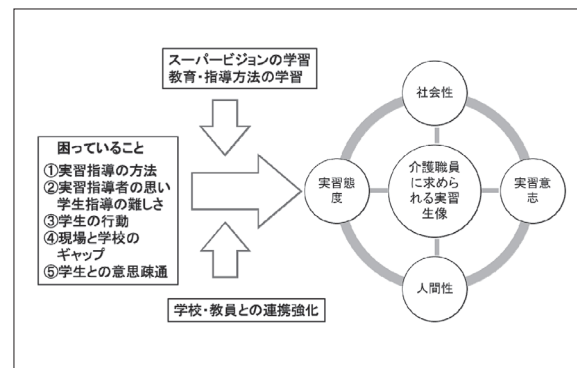


図6 介護職員の実習生に対する意識の構造

おわりに

今研究は、介護福祉士養成課程の介護福祉実習等で介護福祉現場の職員と話をすると、実習生には、やる気と、コミュニケーション能力、元気で明るいなど社会性を求められることが多くあった。しかし、実習までに、その

能力を身につけておくことが難しいと感じることをきっかけに、介護職員が求める実習生像や、実習指導で困っていることから、実習指導者や実習生の育成のヒントが得られれば良いと調査分析を行なうこととした。

しかし、調査数が少ないことや、調査した者の所属が実習指導の主な受け入れ先である、特別養護老人ホームや老人保健施設以外の職員が多く、現在の介護福祉実習には携わる期間が短く少ない、訪問介護事業所の職員が多かったことなどから、結果に偏りがみられたかもしれない。また、アンケートの基本属性で、実習指導に携わったことがあるか否か、介護福祉士養成校を卒業し資格取得したのか、現場経験から介護福祉士資格を取得したのかなどによっても意見が大きく違う可能性があるが、聴取していなかったため、今後の課題としたい。

また、介護福祉士養成カリキュラムの改正（2009年）により、実習指導者講習会がはじまり、学生への指導方法についても、共通の認識や、指導方法の統一、実習での学習内容等の理解を深めているはずであるが、指導者講習会がなかった頃の実習指導で困ることと、現在の実習指導で困ることの内容がほぼ変わっていないことが、介護福祉士養成のための、介護福祉実習の大きな課題ではないだろうか。

引用文献

- 1) 福井県社会福祉協議会「平成29年度 介護実習における介護実習指導者の指導の実態調査」ならびに「福祉施設実習に関する学生（養成校）の実習実態調査」
- 2) 山下恵子，尾台安子「介護福祉実習に対する実習施設側の意識と課題」松本短期大学研究紀要. (14) .105-111 (2005)
- 3) 厚生労働省「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/seikatsuhogo/dl/shakai-kaigo-yousei02.pdf>（閲覧日：2019. 3. 2）
- 4) 同掲書
- 5) 日本介護福祉士会「介護実習指導者テキスト改訂版」全国社会福祉協議会 p 62 (2015)
- 6) 最新介護福祉全書8「介護総合演習」メジカルフレンド社p8 (2015)
- 7) 日本介護福祉士会「介護実習指導者テキスト改訂版」全国社会福祉協議会 p 77 (2015)
- 8) 牛澤賢二「やってみようテキストマイニング—自由回答アンケート分析に挑戦！」朝倉書店 p 91 (2018)
- 9) 福田明他「介護実習指導者の「自信のなさ」に関する要因と改善に向けた課題の研究—面接調査結果のテキストマイニングによる分析を通して—」最新社会福祉学研究 13, 1-13 (2018)
- 10) 高木剛「介護職員が実習指導で困惑した実習生の姿勢・能力等の実態—過去3年間のアンケート調査結果をもとに—」社会事業研究57号127-135 (2018)
- 11) 橋本佳子「介護実習指導者講習会の課題」佐野短期大学研究紀要22号105-113 (2011)
- 12) 福井県社会福祉協議会「平成29年度 介護実習における介護実習指導者の指導の実態調査」ならびに「福祉施設実習に関する学生（養成校）の実習実態調査」
- 13) 同掲書

参考文献

- ① 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版 (2014)
- ② 牛澤賢二「やってみようテキストマイニング—自由回答アンケート分析に挑戦！」朝倉書店 (2018)
- ③ 蒲生俊宏他「実習先と共に構築するスーパービジョンと実習マネジメントに関する研究」日本社会事業大学社会事業研究所 (2011)
- ④ 伊藤優子「介護福祉実習における実習指導者と養成校教員の連携のとらえ方—インタビューの語りの分析—」龍谷紀要 32 (1) , 77-93, (2010)
- ⑤ 加藤英池子「離職者訓練としての介護福祉士養成教育を受ける社会人学生の意識変容」浦和論叢. (56) . 67-82 (2017)
- ⑥ 原田奈津子他「福祉分野における現場実習に関する現状と課題—実習生，養成校，及び実習先（施設・機関）の実習担当職員，利用者間での連携—」長崎国際大学論叢10巻187-196 (2010)